

ヤマト福祉財団NEWS

Yamato Welfare Foundation 2007 Spring

4月20日発行 No14

特集

山崎理事長に聞く 財団のこと 2007年度の事業計画 グループ社員の応援が財団の力です
日頃の活動を通じ、障がい者の働く場づくりを支援しています



イギリスから来られた障がい者のかたがたが、日本の障がい者のクロネコメール便配達業務を視察

福祉はロマンだ! Series06

ヤマト福祉財団賞 受賞者は今…

パンと一緒に彼らの笑顔が
お客さまに届くんです

小島靖子さん 有限会社ヴィ王子取締役・スワンペーカーリー十条店
社会福祉法人ドリームヴィ就労支援センター代表

スワン赤坂店、
クロネコメール便配達
の視察と“下町”浅草を観光

この街で一緒に生きていく
障がい者のクロネコメール便
配達

YWF TOPICS

イギリスから来られた障がい者のかたが
たをネコバスでご案内しました
「国際セミナー」がきっかけで

北から南から
メール便配達最前線レポート

特

集

山崎理事長に聞く
財団のこと 2007年度の事業計画

グループ社員の
応援が財団の力です

日頃の活動を通じ、
障がい者の働く場づくりを
支援しています

財団は4月より15年目の活動に入りました。
山崎理事長に財団の日頃の活動内容や2007年度の
事業計画などについてヤマトグループの若手社員がお聞きしました。

応募殺到の助成事業、それを
支えているのは社員のみなさんです

一同 今日よろしくお願
いいたします。

山崎理事長 みなさんまだ入社
して間もないので、最初にすこ
し福祉財団についての紹介をし
ておきましょう。

財団は、14年前に心身に障がい

いのある人々の「自立」と「社
会参加」を支援することを目的

に小倉昌男前理事長が私財を投
じて設立されました。1995
年の阪神淡路大震災のときに復
興支援として行った障がい者団
体への寄付がきっかけで障がい

者の福祉の現場を知り、経営改
革が必要だと思われました。そ
の実態は福祉的就労という名の
下に、月給1万円以下の労働環
境にあることを知り、強い憤り
を感じて月給1万円の世界から
脱出するのを助けようと決意さ
れました。現在、財団では資金
援助を行う「助成事業」と働く
場づくりを目指した「自主事業」
を主に展開しています。





山崎 篤
財団法人ヤマト福祉財団 理事長

ところで、日本には今、何人ぐらい障がいのある方が生活していると思いますか？ 答えは約600万人です。日本の人口が約1億2000万人ですから20人に1人ということになります。しかし、街でそれほど見かける事はありません。それは障がいの社会参加が遅れているからです。たとえば法定雇用率は1・8%と決められています

小関さん 設立の経緯や目的がよく分かりました。

ヤマト運輸のHP上でも社会貢献として「財団の助成事業をサポート」を謳っています。先ほどもお話に出た助成事業ですが、内容について具体的に教えてください。

山崎理事長 財団の活動は大きくわけて二つあります。パワーアップセミナーに代表されるような自主事業と、ご質問にあつた助成事業です。

助成事業は、進学を希望する障がい者や、障がい者施設・団体に対して、経済的な支援を行うものです。

大学に進学したいけれど、経済的な問題から進学を躊躇する障がい者はたくさんいます。そ

のような志のある方を応援する目的で、4年生大学への進学希望者30数名を対象に、一人年間60万円の奨学金を返済不要で助成しています。こうした取り組みを通じて、小倉イズムを実際に体験していただいた方々が社会に出て、その遺伝子が社会に広がっていつてほしい、と思います。

また、全国には小規模作業所など福祉施設が約6000カ所あります。その多くが資金面で苦しい運営を迫られているのが実状です。

たとえば、活動に必要な車を買いたいとか、働く場をつくるために厨房機器を購入したいが、資金が足りない。そういった団体を対象に1件につき100万円を限度に助成をしています。ちよつとした支援で働く環境を整えることができたり、機械や道具を利用して作業効率

自主事業の狙いは、 「福祉」に経営の視点をいかに導入するか

嶋田さん 先ほど、もう一つ活動の柱としてあげられた「パワーアップセミナー」とは、どういった内容なのですか？

山崎理事長 残念なことに福祉に長年携わっている人は、福祉の就労という言葉で低賃金を正

をあげて、もつと上手に運営できるのであれば、支援してというわけです。

申請件数は奨学金と団体への福祉助成を併せて、全国から1000件以上の応募があります。残念ながら財源の問題からすべてに応じることはできませんので、選考を行っています。

じつはこの選考に、ヤマト運輸社員のみなさんご協力があります。社会貢献課を通じて地域の社員が、直接施設に向いていって調査をしていただいているんです。そうして得られた情報は財団の各事務長を経て集約され、選考の重要な判断に活かされています。

また、各支社では、助成の意図を正しく理解してもらうため贈呈式を開催していますが、これもみなさんにご協力いただいていることの一つです。

ウを説いて回りました。

そこで強く訴えたのは、市場経済のなかで闘っている作業所経営です。お客さまに選んでもらえるサービス、良い商品をつくらなければ淘汰されてしまう世の中において、このハードルを乗り越えずして、経済的な自立はありません。また、障がい者から働く喜びを取り上げることになりました。

セミナーではこうしたことを参加者の方と一緒に考えながら、経営の専門家による講義を実施しています。ここに来て、小倉前理事長が蒔いた種も着実に実を結びだしています。そこで今年からは従来のものを初級編とすれば、もう一步進んだ内容の中級編セミナーも実施する予定です。

小橋川さん 障がい者雇用の推進として、クロネコメール配達事業にも力を入れていただくと聞かれています。私自身は北大阪管内で障がい者のクロネコメール便が配達されているのを見かけたことがないのですが、こういった地域で取り組みが進んでいるのか、展開の現状と、なぜメール便に焦点を当てたのか、教えていただけますか。

山崎理事長 そもそもは、第4回小倉昌男賞を受賞された永山さんがすすめられた沖繩の「わ

んからセンター」という集団がメール便配達事業を請け負ったのが始まりです。

クロネコメール便配達事業というのは考えてみると、四者にとってメリットがあります。

一つは障がい者に働く場を提供できることです。そして何より感謝される仕事であるということ。メール便を配達して、お客さまから「ありがとう」の声をかけてもらって感激したという障がい者がいます。障がいのある方が社会に出ていくきっかけになり、収入も得られます。また、配達を通じて自信がつき遅くなったなどという話も耳にします。

作業所にとってみれば、大きな投資をせずに事業が始められます。自転車一台で現金収入が得られるのはとても魅力的だと思います。

ヤマト運輸にもメリットがあります。障がいのある人たちは、一度仕事を覚えてしまえば、つねに基本に忠実で、しっかりと手順を守ってくれます。ベテランのメイトさんより誤配も少ないと聞きます。取扱量が2桁近い伸びを示しているメール便にとって、良質な戦力を確保することは重要です。

最後に社会としての意義です。先ほどの例ではありません

が、メール便の配達を通じて、地域と障がいのある方との接点ができます。地道ですが、こうしたことが相互理解を含め、差別のない社会へ前進する確実な力になると信じています。

メール便配達事業は、働く場と社会参加という意味で海外からも注目され、先日もイギリスの団体が視察に訪れました。東北支社のように熱心に取り組んでいただけではない地域もあります。今後、ますます良い事例を一步一歩、水平展開していきたいと思っています。

小関さん メール便配達事業と並んで、ヤマト運輸の障がい者への社会貢献というと、やはりスワンベーカーが私には一番強く浮かんできます。スワンベーカーを始めたきっかけというのは？

山崎理事長 パワーアップセミナーを開催するだけでなく、財団自ら障がい者就労の新しいモデルを実践してみよう、という目的で開始しました。

当初は生地からすべてを店舗でつくることを考えていましたが、これはなかなかハードルが高いことが分かりました。幸いにして、このハードルも工場で予備発酵させたパン生地を熟成、成形し、急速冷凍する製法を開発していた、タカキベーカーの高木社長との出会いで全面協力を受け、解決できました。これによって、ホテルにも納品されている冷凍パン生地を使用して、品質と工程の簡略化との両立を図り、香り高い焼きたてパンの販売ができるようになったのです。

小関さん 私が住んでいる市内



Profile

小関 美希 (こせき みき) さん
ヤマト運輸株式会社
関東支社 埼玉主管支店 営業企画課 2005年入社

「助けてあげたい」という気持ちだけでは不十分で、〈福祉〉に経営の視点を取り入れていくことの意義がよく分かりました。埼玉主管では物販商品としてスワンの商品を取り入れようか、という話も持ち上がっています。これからは私たちの側もふだんの仕事のなかで、〈業務〉と〈福祉〉との連携を構築できるような柔軟な発想を、持っていかなければいけないと強く感じました。



Profile

嶋田 恵美子 (しまだ えみこ) さん
ヤマトロジスティクス株式会社
本社 国際戦略課 2006年入社

お話を通して、障がいのある方を支えられる対象として見ていた自分に気づかされました。スワンでは、障がいのある方がマニュアルではないさわやかな笑顔で対応していて、サービスも丁寧。とても居心地のいい空間です。多くの方がスワンで障がい者と自然に接する機会が増えれば、そういった誤った認識は解消されていくのではないのでしょうか。もっとスワンを応援していきたいです。

にもスワンができました。これからの積極的なチェーン展開をしていけるのですか。

山崎理事長 銀座店を一号として、順調に展開し現在では25店舗になりましたが、経営的にはまだまだヤマトグループのご支援があつて成り立っているところがあります。その一つは12月のX'masケーキです。昨年も7万6039個というオーダーをいただきました。本当にあり

がとうございます。

パンの販売は、町に出ればたぐさんのライバルがいます。当然、廉価で「本物の味」をお出しできないとお客さまも付いてくれません。新製品の開発や新市場の開発等、智恵を出して不慮の努力が欠かせません。挑戦ではありますが、たいへん注目されている試みです。今後とも着実な展開を進めていきたいと考えています。

早く、成功事例をつくる。そのために本年も頑張ります

小橋川さん 障がい者の自立と社会参加のための財団がどのような活動をされているがよく分かりました。今後、他に本年度はどのような取り組みが予定されていますか。

山崎理事長 これまでお話しした、スワンベーカーなどほはもちろんのことですが、ベーカーとは別に、「スワンネット」という会社もあります。こちらはジャガイモやタマネギといっ

Profile



小橋川 奈央 (こばしがわ なお) さん
 ヤマト運輸株式会社
 関西支社 北大阪主管支店 人事総務課 2006年入社

私自身ヤマトの社員でありながら、今回の機会をいただかなければ、福祉に遠い存在のままであったかな、というのが正直な気持ちです。小倉前理事長がどのような想いで福祉に取り組まれたのかを理解し、グループの一員として誇りに感じると同時に、この志を広く共有しないのはとても勿体ないことだと感じました。ささやかなことからでも、できることを見つけて始めてみたいと思います。

た産物を仕入れて作業所に卸しています。作業所ではこれを小分け販売することで、利益を出してもらうという仕組みです。販売のコンサルティングも行います。作業所にとっては手堅い現金収入となるはずですが、いま、401の作業所が参加しています。今年はこちらをもっと広げていきたいですね。

また、昨年5月には「ヤマト自立センター」、スワン工舎新座がオープンしました。ここでは21人の障がいのある方々が、スワンベーカーとクリーニング事業に励んでいます。これは就労移行支援事業という位置づけで、2年間という期間を区切り、一般企業へ就労するための社会的スキルを養う施設です。埼玉県で初めて就労移行支援事業の認可を受けました。早くも

三人の方が卒業しています。もう一つ、前年からスタートさせた取り組みに「障がい者の働く場づくり応援プロジェクト」があります。パワーアップセミナーなどで啓蒙活動を実施していますが、その一方でとにかく障がい者が働ける場が少ない。そこで、経営コンサルタントの派遣費用を助成して、成功の事例になるよう、三つの作業所を重点的に支援しています。お手本となる存在をまず作ろう、というのが狙いです。

また、小倉昌男賞もこれまで通り実施します。障がい者の側に立って懸命に努力されている方を表彰し、僭越ながらこうした方々にすこしでも応援のメッセージを贈ればと思います。

嶋田さん 話をお聞きしたいへん共感を覚えました。もつと、

財団の活動を広めていきたいと思っただけですが、スワンセンターの購入以外に私たちがお手伝いできることはありませんか？

山崎理事長 財団の年間活動費の多くはヤマトHDの配当でまかなわれています。ですからヤマトHDが業績をしっかりと出していただいで、安定した配当を得られるというのが、なにより有り難いことです。

また、社員のみなさんには賛助会員になっていただいでいますし、労働組合の夏のカンパを通じて例年、多額のご支援をくださっています。この三つが、パワーアップセミナーや助成金の大切な原資になっています。感謝申し上げますとともに、ぜひみなさんには、こうしたお金やハンディキャップのある人たちの支援に遣われていることをご理解いただいで、障がい者の置かれる現状にも関心を抱いていただければと思います。無関心が一番の敵なのですから。

嶋田さん よく分かりました。まず知ることが第一ですね。

山崎理事長 小倉イズムの実現には厳しい現実があるのは事実ですが、焦らずあわてず諦めずの精神で取り組んでいきたいと思っています。応援よろしくお願いたします。

一同 ありがとうございます。

ヤマト運輸株式会社の障がい者雇用の実績と今後の取り組み

ヤマト運輸では、障がい者雇用の促進に向けて、役職者の意識改革や養護学校への訪問活動など昨年9月16日～11月15日に「障がい者雇用支援月間」を実施しました。その結果、表の通り障がい者雇用人数が902名、障がい者雇用率2.18%となり法定雇用率1.8%を大幅に上回る事ができました。(右の表は担当別雇用実績と部門別雇用実績です)

参考資料

①担当別雇用実績

	視覚・聴覚・言語	肢体	内部	知的	精神	総計
管理	2	8	6	0	0	16
事務	18	186	43	8	4	259
乗務(SD)	2	41	23	1	0	67
乗務(SD以外)	2	26	17	0	2	47
乗務計	4	67	40	1	2	114
作業	42	69	27	353	23	514
合計	66	330	116	362	29	903

②部門別雇用実績

	視覚・聴覚・言語	肢体	内部	知的	精神	総計
事務管理	13	39	9	12	3	76
サービス	0	67	12		0	79
その他主管・支社等	6	42	18	12	2	80
スタツ系小計	19	148	39	24	5	235
エリア	0	6	4	0	0	10
宅急便センター	7	69	35	6	2	119
メール便センター	2	3	7	0	2	14
物流	10	33	11	83	4	141
その他事業所	0	5	2	2	1	10
ライン系小計	19	116	59	91	9	294
ベース計	28	66	18	247	15	374
合計	66	330	116	362	29	903

今後の取り組み

ヤマト運輸の職場では障がい者に向けた働く場所が少なく、より多くの就労ニーズに全部応じにくいことから、メール便配達業務の推進と労働環境整備を進めています。具体的には、障がい者の職域を広げるために全国3,600カ所の事業所ネットワークを活かして、各事業所で障がい者施設と業務委託を押し進め、多くの障がい者に働く場を提供していきます。労働環境整備は、管理者の「障がい者職業生活相談員」の資格取得を推進して、障がいのある方への理解を深め、安心して働ける職場を作っていきます。

※ ヤマト福祉財団2007年度の事業計画は、ホームページをご覧ください。
<http://www.yamato-fukushi.jp/>



▲施設作業所から初のメール便契約社員となった山本敦司さん(武蔵野市「チャレンジャー」利用者)の配達に同行



▼▶ 埼京主管支店武蔵野メール便センターでメール便配達業務の前作業と仕分作業を見学



スワン赤坂店、クロネコメール便配達の視察と“下町”浅草を観光

「国際セミナー」がきっかけで イギリスから来られた 障がい者のかたがたを ネコバスでご案内しました

イギリスのソーシャル・ファーム「リンケージ・コミュニティ・トラスト」で働く知的障がい者と関係者13名が日本の障がい者の実情を知るために来日、各地をめぐりましたが、2月27日の1日を「クロネコメール便」の配達現場やスワン・赤坂店の見学にあてました。

財団では、会社のネコバスを借りてご案内し、熱い交流のひとつを過ごしました。||写真||

この交流が実現したのは、障がい者雇用のあり方をさぐる「国際セミナー」がきっかけです。

ソーシャル・ファームとは、ビジネス的運営手法を取り入れながら、障がい者の雇用機会の創出に取り組んでいる法人または団体のことで、イギリスやドイツなどEU（ヨーロッパ



▲リンケージ・コミュニティ・トラストで働く障がい者・スタッフが、ネコバスで日英交流のひとつときを

▶浅草散策、雷門の前で



◀日本文化に触れて、お参り前のお清めの手洗いを体験



◀▲(社福)武蔵野千川福祉会チャレンジャーで、メール便の封入作業を見学。すぐにとけ込み、一緒に作業を



◀▲スワンの赤坂店



前環境省環境事務次官 炭谷 茂氏



フィリーダ・パービス氏



マーティン・ロッジ氏

今回、来日したフィリーダ・パービス氏(リンクス・ジャパン代表)は、毎回、マーティン・ロッジ氏は2年前に一度、セミナーで講演し、スワンベーカーリーとカフェを訪れたことがあります。

このセミナーを主催しているのは、「(財)日本障害者リハビリテーション協会」と「日英高齢者・障害者ケア開発協力機構日本委員会」で基調講演を毎回、前環境省環境事務次官炭谷 茂氏が行っています。氏は日本にソーシヤル・ファームを2、000カ所創り、障がい者の雇用拡大をはかりたいと情熱を燃やしています。

「ツバ連合」に多くみられます。日本では、福祉的就労や補助金頼りの施設運営が主流だったため、株式会社で障がい者雇用を伸ばしているスワンベーカーリーがソーシヤル・ファームに比較するものとしてノミネートされ、財団がパネルディスカッションに参加してきました。

ヤマト福祉財団賞 受賞者は今……

パンと一緒に彼らの笑顔が お客さまに届くんです

小島 靖子^{せいき}さん

有限会社ワイ王子取締役・スワンベーカリー十条店
社会福祉法人ドリムワイ就労支援センター代表



飾り気がなく、気の置けない近所の小母さん。これがいつ会っても変わることはない小島靖子さんの印象です。ぬくもりのある言葉、説得力、何といってもその行動力。出張販売、宅配などの仕事を障がい者が生き生きとこなしているのも彼等にモチベーションをしっかりと教え込んでいるからです。第3回ヤマト福祉財団賞（現・ヤマト福祉財団小倉昌男賞）受賞者の小島靖子さんにお話を伺いました。

城北の街に燃える福祉の篝火^{かがりび} 多角的な販売で年商9千万円

小島靖子さんの活動拠点である「スワンベーカリー十条店」

をこんど8年ぶりに訪ねて何よりも印象的だったのは、店の界隈が以前と比べて活気に満ち、明るく輝いているように見えたことです。

それもそのはず、開店当初からの店舗と工場は、今も決して大きくないが、路地をはさんで反対側に新たにカフェとパン焼き専門の「工房ワイ」が稼働、来客でにぎわっています。そしてそれぞれの店や工房では、障がい者たちが互いに声を掛け合い、忙しく立ち働いています。各建物の色調の明るさも手伝ってその辺り帯がさながら夢の街、スワン通りといったおもむきを呈しているのです。

『スワンベーカリー』のフランチャイジー第1号店としてスワンベーカリー十条店が開店したのは平成11（1999）年5月。場所はJR埼京線十条駅から歩いて5、6分のところ。東京城北の場末の街。誰が見てもパンなどを売るのに適した場所

とは言えませんでした。

事実、開店前、専門家は1日5万円の上上げがあればよいほうだろう、との低い予測を立てていました。それが今や年間8千万円から9千万円の収入を誇るパンの加工販売の一大基地となっているのです。むろんそれにはわけがあります。

小島さんが手がけたのは、出張販売など販売の多角化です。その形態はさまざま。昼食時などをねらい、特定の会社社屋の一角を借りての店開き。それは大学・高校だったり、役所だったり、数年前からは東京都庁でも。週に2回行くところもあれば3回行くところもある。とにかく積極的に売り場を開拓してゆきました。

霞が関の厚生労働省も例外ではない。ここでは、お届け販売を続けているうちにこそ省内に売店を設けては、ということになり、4年前から厚生省庁舎内に、スワンベーカリー十条店の霞が関店が開きました。

宅配、お届け便もさかんです。あらかじめ約束した個人宅などへ、週に1回、知的障がい者の人たちが届けます。「ありがとう」というのは、この場合品物を受け取る客の側です。届けたほうも満足感でニコニコ。何が何でも自分が届けなければ



● 楽しそうにパンを焼くスタッフ

「人はいかにして『数』を獲得してゆくのか」が研究テーマ。人間が「数」というものをモノにしてゆくその道筋を究めたい……。

研究の一方として出合ったのが知的障がい者でした。

きっかけは「数(かず)」。

小島さんの大学での専攻は数学でした。

生家は商家、衣類雑貨などを中心に商う「何でも屋」。天龍川は家から歩いてほんの数分のところ。夏は川の水しぶきとたわむれ、ハヤ、カジカなどの魚捕りに興じる小島さんの姿が目につかびます。高校は地元の伊那女子高校(現・伊那弥生ヶ丘高校)。そして教職の道求めて上京、東京学芸大学に入學します。

小島さんは昭和13(1938)年8月、長野県南部の伊那市生まれ。諏訪湖から流れ下ってくる天龍川のほとり、彼方に高遠の町を望み、その東方に甲斐駒が岳などの南アルプス、西方に木曾駒が岳を主峰とする中央アルプスと、3千米級の山々を仰ぎ見る絵画的とも言える自然環境にめぐまれたところでした。

できる人できない人が共に 分離教育がいじめの原因に

ば、といつつよい思いがあるからです。売り手と買い手の新しい、そして美しい関係。

このパンの宅配には、小島さんも格別の思い入れがあるようです。その小島靖子さんに、ここに至るまでの簡単な歴史や障がい者に寄せる思いなどをうかがいました。

これはきわめて逆説的です。一般的には、知的障がい者は数の概念から遠く隔たったところに存在しているからです。が、小島さんは、知的障がい者は「数の解りにくい人、ゆつくりモノを考える人たち」であるからこそ、逆に「数」の何たるかを知る手がかりを得られるのではないかと、と着想したのでした。そして小島さんと障がい児らとのつきあいが始まります。

接触を重ねるうち、小島さんの中で障がい者の存在が当初の目的を離れて大きくふくらんでゆきます。まず第一に、それらの人たちと自

分との相性のよさとでもいえるべきもの、彼らに身近なものを感じるようになったこと。それはあの人たちの人間的魅力でしょうかね、と小島さん。

他方、彼らの家庭や学校などでの置かれた状況の厳しさ、山積する問題を知るにつれ、それをただ傍観することは許されないと考えるようになっていきます。研究者から運動家への意識の転換、とでもいうべきか。

大学卒業後、小島さんは、都内の中学校で教職につきますが、やがて養護学校に移ります。そして32年間、都立八王子、同王子養護学校で



● スワンペーカリー十条店



● スワンカフェの店内



● 路を隔けた建物が、社会福祉法人「ドリームワイ」1階はスワンカフェと工房ワイ



● スワンベーカーリー十条店の明るい店内



● 厚生労働省に出店「スワンベーカーリー霞ヶ関店」(上) / 都庁の納品販売、職員食堂「西洋フード店」にある販売スペース(下)

障がいのある生徒らと苦楽を共にします。
 「30余年も養護学校に勤務したのは、そこが私にとって働きやすい職場であったからではないんです」と小島さん。
 障がい児と一般の生徒を分けて教育する現在の教育制度は間違っている。そのことを問い続けたいと考え、行動しているうちに32年が経った・・・と。

小島さんが養護学校に転じた頃は、障がい者についての家族や世間の意識はまだ低く、当の子どもらの多くは家の中に閉じこもって暮らしていました。小島さんたちはそれを一人ひとり掘り起こし、登校を呼びかけ学校に迎え入れる運動をします。そして卒業後は、ほとんどは就職の世話です。製本屋、クリーニング店、飲食店など、とにかく町なかの零細企業のオヤジさんたちに頭を下げて卒業生を雇用してもらおう。
 時代は変わり障がいの者の就職先は広がったが、卒業生の生活の安定

今後は地域に貢献する仕事を 彼らは普通の人よりいい接客

「考えてみてください」と続けます。「元気なお兄ちゃんお姉ちゃんは家から近くの学校に通い、弱い、障がいのある子どもは遠くの学校(養護学校)へやられる。それ自体矛盾している上に、障がい児は自分が生まれ育った土地の人らと別れて暮らすわけで、これじゃ障がい者に対する一般の理解が進むはずがない。自分の身近なところで障がいのある人ががんばって生きている。できる人もできない人も一緒にいいんだという認識が社会の土台として構築されない限り、ノーマライゼーションも絵に描いた餅で終わってしまふ」
 「今、学校におけるイジメが大きな



● ブックオフの中間買取事業も行っている



● スワンベーカーリー赤羽店の店内



● 道を挟んで店や工房が立ち並ぶ「スワン通り」

や恋愛、結婚など年頃の悩みはつきません。障がい当人の親たちの老いも目立ちます。小島さんもしっかり定年を迎える年齢になっていました。
 小島さんが王子養護学校の卒業

生の保護者らと語り「ヴィの会」を結成したのはその頃。卒業生のこと忘れられず、彼らをいつまでも応援していこうというのが目的です。そしてその会が母体になって「有限会社ヴィ王子」を設立、「スワンベーカーリー十条店」開店へと一直線に進みます。「ヴィの会」は平成14(2002)年に社会福祉法人の認可を得、翼下に工房ヴィ(通所授産施設)グループホーム、就労支援センターなどを抱えて大きく羽ばたいています。
 「障がいは仕事ができないというのは認識不足、偏見だ。私自身、接客業などムリだろうと考えていたが、彼らは普通の人よりいい接客をしている」という小島さんは、障がい者施設などの今後の事業展開のありようについて次のように語ります。
 「障がいのある人が働けるということは、それがその地域で必要とされている仕事であること、地域にとってプラスになる仕事であることが決め手になると思う」。
 自信がなければ言えない言葉です。
 ■取材・文 高田三省

この街で、
一緒に生きていく。



障がい者の クロネコメール便配達

「障がい者のクロネコメール便配達事業」
問い合わせは（財）ヤマト福祉財団 押尾
TEL 03-3248-0691 FAX 03-3542-5165
Email y.zaidan@yamatofukushizaidan.or.jp



メール便配達 最前線 レポート

“坂道の多い高知の町中”
——尾崎幸司さん



障がい者のクロネコメール便配達、各地で広がっています。今回は新聞にも取り上げられた北海道千歳市のNPO法人ハートフルネットワークほほえみ(北海道新聞、財団ニュース13号掲載)と高知県高知市の第2おおぞら作業所(高知新聞で紹介)、そして一緒に取り組んでいるメール便センターの現地レポートです。

どちらのメール便センターでも共通しているのが「障がい者だということを意識していない」という言葉。メール便をお客さまにお届けする責任・姿勢は、施設作業所のメイトさんも同じです。



“雪国ではソリが大活躍”
——澤田大志さん



▲高知新聞が尾崎さんを紹介
(2007年1月15日夕刊)



▲「尾崎さんの担当は坂道の多い地域。転んだりしないで無事にセンターに戻ってきてほしいといつも思っています」と、山崎智信高知旭センター長

◀この仕事に誇りを持ってます。「社員になりたい」と、尾崎司さん



▶今年度は一主管で2カ所の施設にメール便配達参入の目標を立てて動いています」と話す、内山修財四国支部事務長(中央)、坂本嘉昭メール便課長(右)



▲高山功ドライバーとすれ違って

高知主管支店 高知旭町宅急便センター

面積80.2km²/人口22,803人/世帯数9,970世帯

**社会福祉法人こうち福祉会
知的障害者小規模通所授産施設
第2あおぞら作業所**

2005年6月メール便配達開始。当初1日40冊位から現在約100冊を配達。クロネコメイトは尾崎幸司さん、1名。メール便配達以外ではリサイクル事業、委託事業グループホームの運営など(2月現在)。

本人が望めば、 四国で初の契約社員に

「自分がメール便のセンター長になつたとき、尾崎さんが障がい者だということに、まったく気がつかなかったんですよ」と話す高知主管支店メール便課長の坂本さん。

尾崎さんがメール便の仕事を始めたのは、2005年9月。最初は1日30冊くらいのペースからスタートして、今は約100冊位を配達しています。元々地図を見るのが得意な尾崎さんは、3日も配達したらほとんど独りで配達できるようになり、配達に同行していた作業所の下元所長も根を上げるほど。「自分は尾崎君の代わりになれない。休んだらヤマトさんの迷惑になるから、休まないことを目標にやろう」と最初に話したそうです。障がいがあることで周りからダメだとレッテルを貼られていた尾崎さんが、メール便を配達することで働くことに自信が付き、それが周りにいい影響を与え、今では作業所のメンバーの目標になっているのです。

旭町メール便センターは、ほとんどのメイトさんがセンターにメール便を取りに来るので、顔を見ながらのコミュニケーションがあります。構内作業の仕分けアシストリーダーがメイトさんたちの状況を見ながら、

助け合う環境ができています。尾崎さんへのヤマト運輸としてのサポートは、配達開始当初の冊数調整と転居情報の提供だけでした。地図の見方やお客さまへの対応は、作業所のスタッフが、サポートしてくれるからです。

「尾崎さんは稼働日を絶対に守る。責任感があるんですね。誤配もクレームもありません。尾崎さんが希望すれば、メール便の契約社員としての選択肢もあります」。

「尾崎さんをみていたら障がい者と感じません。障がいのある人達が施設の外に出て、一緒になってメール便を配るようにならなければ、私たちはいつでも受け入れられますよ。メール便にしろ作業にしろ、いろいろな仕事がありますから。一つの仕事をみながら助け合いながらやっていく。ヤマト運輸は昔からそういう会社です」。



▲第2あおぞら作業所の下元真人所長(右)

1冊のメール便配達から世界が変わる



▲荷物をみて、荷主さんの仕事、その役割や社会の仕組みをメイトさんに教えます。それで荷物の意味がわかってくるんです。とほほえみの所長後藤真理さん(左)とクロネコメイトの原口洋和さん(右)



▲吹雪で地図にない届け先を探すのはつらかったけれど、健康になって話し方が上達してきましたと、澤田大志さん



▲ほほえみ所内で配達前の仕分作業

「今年の1月は、ほほえみさんに助けられました」と言葉を聞いた千歳北斗前メール便センター長の田中さん。ほほえみさんは365日営業。一般のメイトさんが突発休みをした時はもちろん、暮れやお正月にもそのエリアをカバーできる4週6休のシフト体制を取っています。

昨年の7月、やるならとにかく雪の降る前に1カ月でも早いほうがいいと判断し、既存のメイトさんのエリアの一部を分け、ほほえみさんに担当してもらいました。

千歳北斗メール便センターでは、新しいメイトさんが入ると、地図の作り方や情報入力機器の操作を含め、必ず同行配達を行っています。ほほえみさんも最初はメンバー3人と所長の後藤さんの4人で、お休みしたメイトさんのエリア、1丁から2丁の20冊位からスタートしました。

後藤所長は「まず、仕事の意味を理解してもらうために、プロジェクトの本とビデオを見て、その感

想を書いてもらいます。ヤマトはどういう会社なのか、自分たちがどういふ会社に関わるのか、チラシの投げ込みと違い、個別に配達する宅急便の流れをくんだメール便だということを理解しなければ、本当の意味での仕事ができないと思うんです」と話します。

現在担当しているエリアは、末広町と清水町。清水町は飲食街で、ごちやごちやしているだけでなく、昼間はほとんど人がいません。またシャッターが閉まって確認ができない。ドアの隙間からもメール便を入れることができないなど、配達のやりにくい地域です。しかし配完にしなれば仕事は終わりません。

前センター長の田中さんは、「とにかく何とか調べて配達し、持ち戻りを少なくしてほしい。それで間違ったら責任は自分が取るから」と。それに応えて、ほほえみさんでは元のネットワークをフルに使って、お店の名前や店主の名前などバラバラ

で来る荷物の宛先を調査し、配達を完了させました。ときにはお店の閉く夜の9時頃に配達することもあります。「こうやっていくと、私たちに情報も入って、地図が充実し、持ち戻りが少なくなっていくんです」と後藤所長。



前センター長の田中さんに、ほほえみさんへの要望を聞いてみました。「感謝することはあっても、障がいがあるからといって特別なことは何もありません。彼等と仕事をすることで、逆にこちらのモチベーションが上がります。配達して「ありがとう、お疲れさん」と声をかけてもらえることを、何より嬉しいと言ってくれます。1冊のメール便配達から社会とつながり、彼等の世界が変わるんですよ。できれば、ほほえみさんのメイトさんをもっと増やしてほしい。広域のエリアを担当してもらえれば、365日カバーできるし、これほど効率のいいことはありません」



▲最初は「ヤマト運輸です。メール便の配達に来ました」という言葉が言えなくて、私の後に隠れていたのに、と同行指導したメール便契約社員の鎌田淳子さん(左)。右は坂東嘉信メール便課長



▲北海道の5主管で6作業所、これを15施設くらいに増やしたいと思っています。厳しい気象条件の中、施設も不安でしょう。田中貞文前センター長(右)のように「何かあったときは僕が責任持ちますから」と言ってくれるのは心強いです。と、加藤房男財団北海道支部事務長(左)



▲長瀬秀明ドライバーに道をたずねて

千歳主管支店 千歳北斗メール便センター

千歳エリア(千歳北斗、千歳富岡、千歳泉沢)
面積594.96km²/人口92,500人/世帯数41,100世帯

千歳障がい者就労センター

NPO法人ハートフルネットワークほほえみ

精神障害者就労支援センター

2006年7月メール便配達開始。8月に1,225冊、07年1月には3,606冊と実績を上げている。メール便配達の他にも、企業の委託事業や、ピーズアクセサリーの製作販売など。クロネコメイト3名(2月現在)。

“月給1万円からの脱却”に行政も動く



◆塩崎官房長官がスワン、赤坂店に

2月15日、政府の塩崎官房長官がスワンカフェ＆ベーカリー赤坂店を訪れ、障がい者の雇用条件などをヒアリングしました（写真上、写真上右）。

政府は「成長力底上げ戦略」をまとめましたが、そのなかには、「福祉から雇用へ」推進5カ年計画、障がい者の賃金を引き上げる「工賃倍増計画」などが盛り込まれました。

障害者自立支援法の施行や、障がい者の権利条約の国連総会での採択など、国内外でノーマライゼーションを目指す動きが高まっていますが、身近なところで作業所や授産施設の月収を底上げすることが先決です。行政もいろいろ動いています。



◆埼玉県上田知事がスワン、北浦和店を訪問

2月16日には、埼玉県上田知事がスワンベーカリー北浦和店を訪問。障がい者の働く現場を視察しました（写真右）。



◆山崎理事長 太田市で講演

1月24日に群馬県太田市で行われた太田市社会福祉大会で財団の山崎理事長が講演を行いました（写真上）。太田市は清水聖義市長が障がい者の働く場づくりに力を入れており、スワンベーカリー太田店もオープンしています。講演の後、山崎理事長は清水市長にクロネコメール便事業を紹介し、今後の障がい者雇用について懇談しました（写真左）。

今年もカレンダーのご寄付、 ありがとうございました！

東京・銀座の伊東屋様から毎年、カレンダーのご寄付をいただいています。このカレンダーを全国の財団支部が、ヤマト運輸の支社・主管支店で販売。収益金を財団の活動費に充ててきました。今年は482,728円となり、その全額を(社福)ヤマト自立センターに寄付いたしました。

伊東屋様、カレンダー販売にご協力いただいた社員のみなさん、ありがとうございました。



九州支社



中部支社



北信越支社

各支部で
工夫をこらした
販売をして
いただきました！



関西支社

25店目のスワンカフェ & ベーカリーオープン 1月20日、東京・町田店

おいしい焼きたてパンと、店内を飾る絵画が当店の魅力です。作者のマッケンジー・ソープは障がいを持ちながらも世界が認める芸術家。自らの力で運命を切り開いていきたいという彼の思いが伝わってきます。コーヒーを飲みながら、くつろぎのひとときをお過ごしください。



オープンの日はいにくの雨でしたが、店内はお客さまの熱気でいっぱい



所在地／ 東京都町田市中町3-7-1F
電話番号／042-785-4533
定休日／ 土曜、日曜、祝日
アクセス／小田急線町田駅より徒歩10分

南の島にもスワンがほしい

日本の障がい者福祉を学ぶため、南太平洋にうかがふフィジー、マーシャルなどの島々の福祉関係者が来日、2月14日、スワン赤坂店を訪れました。

海津社長から説明を受けた一行のなかから、南の島にもぜひ、スワンが欲しいとの声があがっていました。





ART HEALING

大回顧展 モネ
印象派の巨匠、その遺産

国立新美術館の開館を記念して 世界のモネが集結「大回顧展モネ」

会 期▶2007年4月7日(土)～7月2日(月)
毎週火曜日休館。ただし5月1日は開館
会 場▶国立新美術館(東京・六本木)
東京メトロ千代田線乃木坂駅6出口(美術館直結)
東京メトロ日比谷線六本木駅4a出口徒歩5分
都営地下鉄大江戸線六本木駅7出口徒歩4分
開館時間▶午前10時～午後6時
※金曜日は午後8時まで。入館は閉館30分前まで
観覧料金▶

	一般	大学生	高校生
当日	1,500	1,200	800

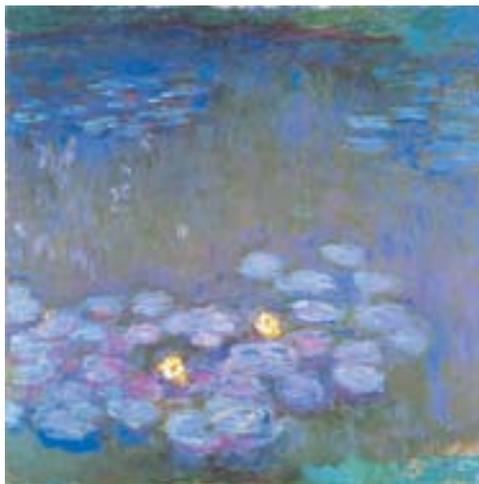
○中学生以下は無料
○障がい者手帳をご持参の方と介護の方1名は無料

主 催▶国立新美術館、読売新聞社
共同企画▶オルセー美術館

問い合わせ先▶☎03-5777-8600
展覧会ホームページ <http://www.monet2007.jp>



3<サン＝ラザール駅>



2<睡蓮>



5<モントルグイユ街、
1878年パリ万博の祝祭>



4<カミーユ、ジャン、乳母>

- 1<日傘の女性>
1886年 オルセー美術館/Photo:RMN
- 2<睡蓮>
1914-1917年 アサヒビール株式会社
- 3<サン＝ラザール駅>
1877年 オルセー美術館/Photo:RMN
- 4<カミーユ、ジャン、乳母>
1873年 個人蔵、スイス
- 5<モントルグイユ街、1878年パリ万博の祝祭>
1878年 オルセー美術館/Photo:RMN



1<日傘の女性>

印象派の巨匠、クロード・モネ(1840～1926)の回顧展が、国立新美術館(東京・六本木)で開催されています。パリのオルセー美術館やニューヨークのメトロポリタン美術館、ボストン美術館をはじめ、国内外から100点近い名作を、一堂に集めた大規模な展覧会です。障がい者手帳を持つ方と介護者1名は無料です。この機会にぜひモネの名作にふれてください。この「大回顧展 モネ」の取り扱いを、ヤマトグループのヤマトロジスティクス株式会社が協力しています。

ヤマト福祉財団全国支部連絡先 (ヤマト運輸(株)内)

支 部	事 務 長	連 絡 先
北海道支部	加藤房男	TEL.011-891-5040
東北支部	平井 忠	TEL.022-374-8065
東京支部	名古屋健史	TEL.03-5564-3705
関東支部	森田雅哉	TEL.045-508-6106
北信越支部	酒井 貢	TEL.025-231-9512
中部支部	久野善之	TEL.0561-61-5111
関西支部	石田久雄	TEL.06-6414-5400
中国支部	竹下憲雄	TEL.082-849-1451
四国支部	内山 修	TEL.0877-46-7875
九州支部	目野和彦	TEL.092-931-3340
沖縄支部	松茂良興三	TEL.098-840-3605



中部支部
久野善之新事務長が就任
しました。
よろしく申し上げます。



四国支部
内山修新事務長が就任
しました。
よろしく申し上げます。

